

小節の内部構造について

岩 本 弘 道

一 般 科

On the Internal Structure of the English Small Clause

Hiromichi IWAMOTO

Abstract

This paper is an attempt to investigate the phrase-internal structure of so-called "small clauses" in English, which appear smaller in size than full clauses, in the sense that though they can express predication relation with the subject and the predicate within themselves as a clause normally does, they lack the complementizer, the inflectional node, especially Tense element, and sometimes even a verb. It has often been claimed that they should be analyzed as a maximal projection of the predicator, which can be any lexical category; a noun, an adjective, a preposition, or a verb. But there are some pieces of evidence suggesting that they also have a functional layer over the lexical projection, as the full clause does. It is demonstrated that the functional projection in question is an AgrP, not an IP, however. Therefore, "small clauses" are not so small as have been thought, but still are "smaller" than the full clause.

Keywords: Agreement Phrase (一致句), Functional categories (機能範疇), Internal Subject Hypothesis (内部主語仮説), Predication (叙述), Small clause (小節)

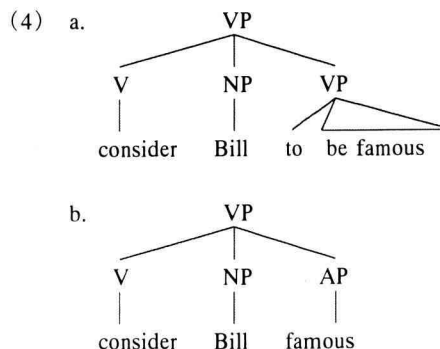
1. 小節とその特徴

英語には、次のような「目的語(対格) + to不定詞」Accusative with *to*-infinitive構文(1)と、「目的語(対格) + 目的格補語」Accusative with Object Complement 構文(あるいは無動詞節 verbless clauses)(2)と呼ばれる構文がある。これらの構文は、伝統文法においては(3)のようにSVOC構文として分析されてきた。

- (1) a. John considers Bill to be famous.
b. We believe Garp to be a genius.
- (2) a. John considers Bill famous.
b. We believe Garp a genius.
- (3) a. John considers Bill to be famous.
We believe Garp to be a genius.
S V O C
b. John considers Bill famous.
We believe Garp a genius.
S V O C

これを句構造によって示せば、概略次のようになる。それぞれ名詞句NPが目的語Oに、to-VP(to不

定詞句), APが目的格補語Cに対応する。⁽¹⁾



しかしながら、この2つの構文は意味的には次のthat節をとる構文(5)に等しく、「目的語 + 補語」の部分は「主部 + 述部」の関係であり、that節やto不定詞節と同じように節であるといえる。

- (5) a. John considers (that) Bill is famous.
b. We believe (that) Garp is a genius.

ただし、次に示すように補文標識のthatやfor、不定詞標識のto、さらには繫辞のbe動詞が生起できな

いという点で, *that*節のような完全な節 *full clause* よりも小さい節であるという意味において「小節 *small clause*」と呼ばれている。⁽²⁾

- (6) a. *We consider *that* John famous.
 b. *We consider *for* John famous.
 (7) *We consider John *to* famous.
 (8) *We consider John *be* famous.

こうした小節補文の述部には(1)のような形容詞句 *AP*や名詞句 *NP*しかねないわけではなく、他にも前置詞句 *PP*(9)や動詞句 *VP*(10)の場合がある。つまり語彙範疇なら何でもよい。

- (9) 前置詞句 *PP*述部小節補文
 a. He expected off the boat by tomorrow.
 b. I want the dog out of the house.
 c. Could you let the cat into the house?

- (10) 動詞句 *VP*述部小節補文⁽³⁾
 a. I like to see you dance.
 b. They made John leave early.
 c. Why not let everyone go home?

小節の部分が「目的語」と「補語」から成るのではなく「主部＋述部」から成る節であるということは、その部分が単一の構成素を成していることを意味する。すなわち、(1)は *SVOC*構文であるというよりも、むしろ上の(5)と同じ *SVO*構文であることになる。⁽⁴⁾

- (11) a. John considers [Bill to be famous].
 We believe [Garp to be a genius].
 S V O
 b. John considers [Bill famous].
 We believe [Garp a genius].
 S V O

さて、この小節の構成素性についてであるが、動詞の後の位置では、小節は、そのままでは構成素かどうか分からない。また、一般に構成素であることを示すテストとして用いられる移動可能性のテストも、次に示すように小節には適用できない。

- (12) A'移動(話題化)
 a. *[*sc* John very intelligent], we consider
 b. [*cp* That John is very intelligent], they never believe.
 c. [*NP* This book], you have to finish reading.

- (13) A移動(受動文)⁽⁵⁾
 a. *[*sc* The taxi driver entirely innocent] was believed by everyone.
 b. [*cp* That the taxi driver was entirely innocent] was believed by everyone. (Haegeman 1994: 172)

*to*不定詞補文も、後述のように節 *IP*を成していると分析されるが移動できない。

- (14) a. Everyone believed [*IP* the taxi driver to be entirely innocent].
 b. *[*IP* The taxi driver to be entirely innocent] was believed by everyone.

しかし、これは小節の主語が格を付与されないからという別の理由による(表層構造・*PF*における格付与の隣接性条件の違反)のであって、必ずしも小節や不定詞補文が構成素を成していないことを示している証拠とはならない。

むしろ、以下に示すように、小節を成す「主部＋述部」が単一構成素であることを示すデータがある。まず小節は等位接続が可能である。一般に単一構成素どうししか等位接続できないので、小節も単一構成素を成していると言える。⁽⁶⁾

- (15) a. I consider [this man idiot] and [that man a genius]. (Aarts 1992: 37)
 b. I can't imagine [John content with his lot] and [Mary complaining of hers]. (大庭 1998:255)
 c. I won't let [my son put of the house] or [my daughter go to the disco].. (ibid)

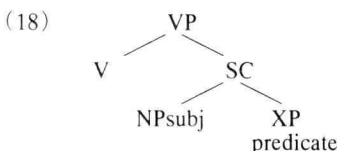
次に、小節それ自体がは文の主語となることができる。主語は節に1つしか生起できないので、「目的語＋補語」が単一構成素となっていると解釈できる。

- (16) a. [Workers angry about the pay] is just the sort of situation that he ad campaign was designed to avoid.
 b. [Workers angry about the pay] des indeed seems to be just the sort of situation that he ad campaign was designed to avoid. (Safir 1983)
 c. [Loise in hospital] is what we should avoid. (Guéron & Haegeman 1999: 109)

さらに小節は単独文としても生起できる。談話の中で独立した単位として生起するためには最大投射である単一構成素でなければならないと言えるので、小節もそのような単一構成を成していることになる。

- (17) A: I think Bronsky is such a clever author.
 B: What! Bronsky clever?! Ha!
 (Radford 1988: 330)

以上のことから、小節補文(*Sc*で示してある)は単一構成素を成しており、概略次の(18)のような構造をしていると言える。



しかしながら、*SC*は便宜上の名前にすぎず、統語範疇とは言えない。*SC*の統語的正体は何かという

問題が生じる。

また、Xバー理論に従えば、句構造は必ず主要部を持たなければならない、すなわち内心構造でなければならないとされるが、上の構造にはそれらしきものは存在しない。したがって、SCの主要部とは何かという問題が生じる。⁽⁷⁾ そして実はこの2つの問題は同一の問題である。

2. 節の構造と生成

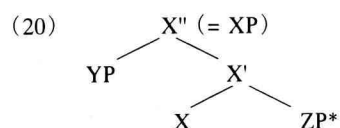
小節の範疇とその内部構造の分析に入る前に、節一般の構造と派生について見ておく。

2.1. 述語の項構造とその投射

文の中心は述語である。述語となる語彙項目は、それが文として成立するのに必須の要素である項 argument の数と、それぞれの項に与えられる主題役割 θ -role (意味役割) の指定を受けている。その語彙特性が句構造を規制するXバー理論に従って、句を投射する。主要部Xは、(19)のXバー式型に従い、まずそれが持つ語彙特性として選択する補部ZPと共に中間投射となるX'を投射する。補部ZPの数は主要部の語彙特性によって0 (自動詞の場合)、1つ (他動詞の場合) あるいは2つ (put, give などの3項他動詞の場合) となる。次にX'は指定部YPと共に最大投射となるX''を投射する。バーレベルはこの2までで、この最大投射X''が従来の句XPに対応する。(20)には示していないが修飾要素は、一般にX'あるいはX''に付加されて、同一レベルの投射を拡張する。主題役割は、それを付与する主要部の最大投射内で付与されねばならない。

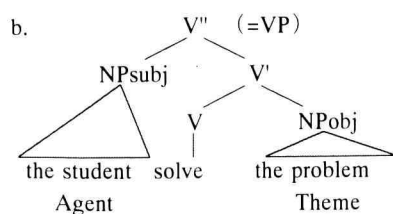
(19) Xバー式型 (X-bar Schema)

- a. $X'' \rightarrow YP, X'$
- b. $X' \rightarrow X, ZP^*$



動詞の場合、例えば solve のような動詞は語彙的特性として目的語 (補部) と主語 (指定部) を伴っており、それが上のXバー原形に従って最大投射として、次のような動詞句VPを投射する。

(21) a. solve: V <Agent, Theme>



このように文IPの主語がはじめてからIP指定部に生

成されるのではなくて、基底では動詞句VPの指定部に生成されるとする案を「VP内部主語の仮説」と呼ぶ。Cf. Kuroda (1988), Fukui (1986/95)

この仮説はさらに展開されて、「すべての語彙範疇 (動詞V, 名詞N, 形容詞A, 前置詞P) はその指定部に主語を持てる/持たねばならない」という「(XP)内部主語の仮説」となる。(Stowell 1981, 1983, 1989, Huang 1993)⁽⁸⁾

ただ、同じ動詞でも、次に示す「繰り上げ動詞」(22)や「非対格動詞」(23)などでは、その語彙的特性によって、主語 (外項) を必要としない。しかし少なくとも英語に置いては表層では、「節は主語を持たねばならない」(拡大投射原理 Extended Projection Principle: EPP) という原理に従って、主語の生起が義務的なため、その場合には主語の位置に意味のない形式的な要素である虚辞の it や there が生じることになる。

(22) 繰り上げ動詞 raising verbs

- a. seem: V, <Proposition>
- b. [VP _ seems [CP that John will win the race].
It seems [that John will win the race]
- cf. John seems to have succeeded.
< _ seem [IP John to have succeeded]

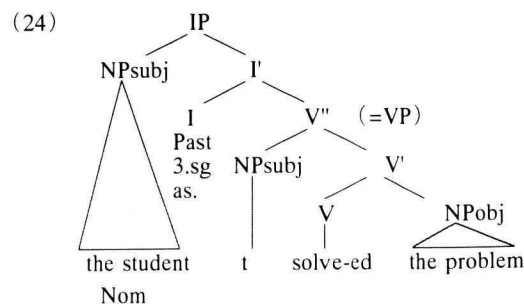
(23) 非対格動詞 unaccusative verbs

- a. occur: V, <Theme>
- b. [VP _ occurred NP]
There occurred an accident last night.

2.2. 時制節・定形節

さて、述語動詞は動詞句を投射しただけでは文には成らない。動詞句VPは命題の内容を表すだけであって、真理値を持った事実を表す文としての真の命題となるためには時制辞Tが必要となる。それを担うのが動詞の語尾変化であるが、構造的には動詞句VPを補部とする屈折辞I(nfl)の位置である。屈折辞は、この時制素性Tとさらには文法的な数・人称・性などの一致に関わる ϕ 素性を持っているとされる (従来のAGR)。

そしてVP指定部に基底生成された主語名詞句は、屈折辞I(nfl)に含まれる時制辞Tから主格 Nominative Case を付与されるために、IP指定部へと移動する。



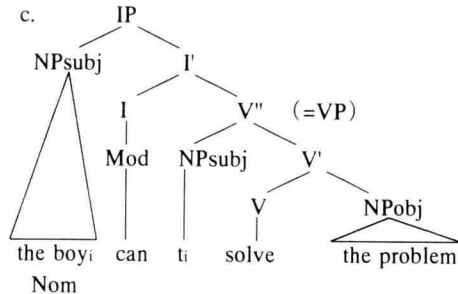
主語移動についてだが、左記の例では一般動詞はVP主要部の位置に留まるため、本当に移動が

必要か否かが明白ではないが、時制辞の位置には、他に *can/could*, *will/would* などの法助動詞が生起する場合もある(25)。そして、この場合には主語の移動がどうしても必要となることが分かる。(26)に示すように主語が移動しないと肯定文の正しい語順が派生できない。

- (25) a. [IP The boy [_I can] [_{VP} _ solve the problem]]
 b. [IP The boy [_I could] [_{VP} _ solve the problem]]
 (26) * [IP can/could [_{VP} the boy [_V solve the problem]]

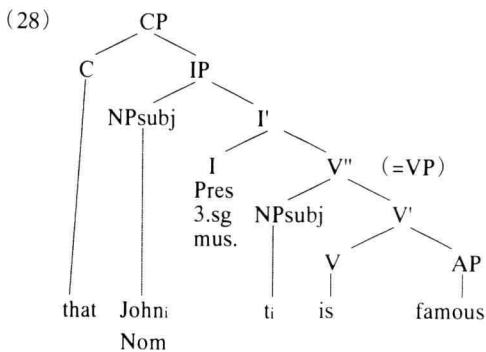
また、英語の法助動詞 *Modal auxiliary* (Mod) には原形がない(例えば *to* 不定詞としては生起しない)が、これは法助動詞が一般動詞とは異なり、本来的に時制辞と融合しているからであると考えられる。

- (27) a. I want to can sing better.
 b. I want to be able to sing better.
 c.



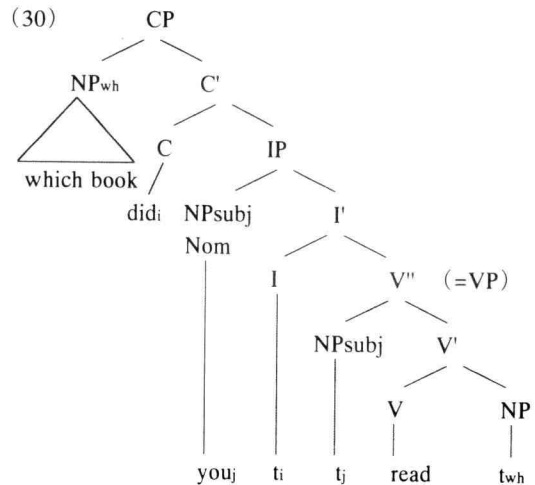
さらに、(5)の *that* 節のような従属節の場合や、主節でも疑問文などでは、TPの上に補文標識 *C* を主要部とするCPが形成される。

- (5) We consider [CP that [IP John is famous]]



疑問文では、時制辞の位置にある要素が補文標識 *C* の位置へ主要部移動する。さらに *wh* 疑問文の場合には *wh* 句がCP指定部に移動する。

- (29) a. Can [you solve this problem?
 < You can solve this problem.
 b. Which book will you read _ ?



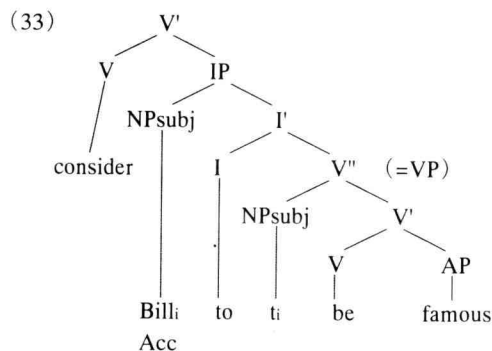
疑問文が従属節になると補文標識が *that* から *if* または *whether* に変わる。また *wh* 句移動に関しては同じであるが、主節でのような主要部移動は生じない。

- (31) a. I wonder if you can solve this problem.
 b. I wonder whether you can solve this problem.
 (32) a. I don't know which book you will read.
 b. *I don't know which book will you read.

2.3. 不定詞節・非定形節

時制辞が時制の指定を持たない場合には、不定詞標識の *to* が屈折辞 *I* の下に生じる。(1)の *to* 不定詞補文は、例外的格標示ECM構文と呼ばれ、全体は従属節であるにもかかわらず補文標識 *C* がないIPであるとされる。

- (1) a. John [_{VP} considers [IP Billi to [_{VP} be famous]]]



(1)の *to* 不定詞補文の主語は、時制節のような主格ではなく目的格 *Accusative Case* を持つが、これは「例外的格標示」*Exceptional Case Marking* (ECM) によって主節の動詞から付与される。それが例外的と呼ばれるのは、一般の格標示では、他動詞(や前置詞)は通常その姉妹関係にある名詞句に(統率によって)目的格を付与するが、(2)では動詞の姉妹は不定詞補文IP全体であり、姉妹ではない補文IPの主語に目的格を付与するからである。この場合、動詞はIPという最大投射を越えて補文IPの指定部の位置だけを統率できるとす

る。

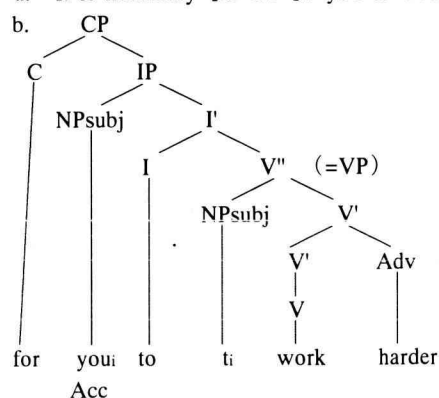
一方、明示的な主語が無い場合には、不定詞節の主語の位置には見えない名詞句 **PRO** が生起するが、「**PRO**は統率されてはならない」(**PRO**の定理 **PRO Theorem**)ことから、この場合の不定詞節は **IP**ではなく**CP**となり、**C**には空の要素が入る。そのため **CP**と**IP**が主節の動詞からの不定詞主語の統率を阻止することになる。

- (34) John tried [_{CP} C [_{IP} **PRO** to persuade Mary]]

ECM不定詞補文に **PRO**が生じないのは、**IP**だけでは主節の動詞からの統率を阻止できないからである。

to不定詞節で補文標識が生じる場合は、**that**ではなく**for**が生じる。この場合 **for**が不定詞節の主語を、これも **IP**を越えて例外的に統率し、それに目的格を付与する。

- (35) a. It is necessary [_{CP} for [_{IP} you to work harder]].

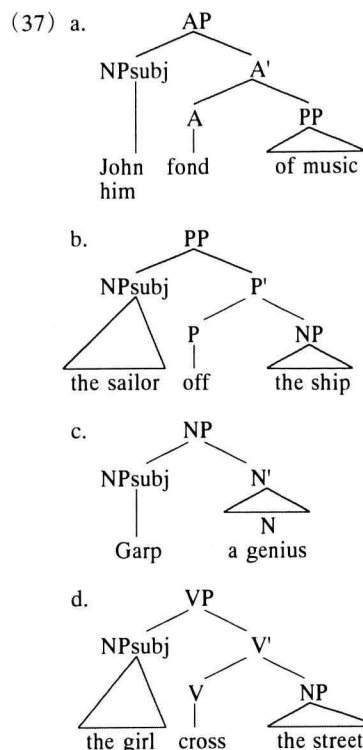


3. 小節のXP分析とその問題点

3.1. 小節のXP分析

さて、そこで小節補文の構造だが、上で見たように小節には補文標識が生起できない。さらに **PRO**も生起しない。このことは小節補文が **CP**ではないことを示している。また **T**の要素も生起しない。従って **IP**でもない。また述語が動詞でない場合には、定形節の場合と違って、**be**動詞も生じない。このことは、**VP**が欠けていることを示している。すると、小節補文は裸の述部句、すなわち小節述語の最大投射だけであるということになる。そして、補文主語は述部句の指定部にあるということとなる。そして、この指定部の位置は、主節の動詞に統率されるので、上で見た **ECM**不定詞補文の場合と同じように目的格を付与されることになる。

- (36) a. We found [John/him fond of music].
 b. They expected [the sailor off the ship by tomorrow].
 c. We consider [Garp a genius].
 d. I saw [the girl cross the street].



このような分析を示唆したのは Stowell (1981, 1983)であり、Chomskyもそれに従った。

3.2. SVC構文と小節

小節補文を取るいわゆる **SVOC**構文に類似した構文に次のような **SVC**構文がある。

- (38) a. John seems very happy.
 b. Mary seems fond of music.
 c. Bill seems in trouble.
 d. Garp seems a real genius.

これは次に見る繰り上げ構文 (39b)の小節版とも言える。

- (39) a. It seems that John solved the problem.
 b. John seems to have solved the problem.

どちらも補文の主語が空の主節主語の位置 **[e]**へと名詞句 **NP**移動している。

- (40) a. [**e**] seems [_{IP} John [_{I'} to have solved the problem]]
 b. John_i seems [_{IP} ti [_{I'} to have solved the problem]]

- (41) a. [**e**] seems [_{AP} John [_{A'} very happy]]
 b. John_i seems [_{AP} ti [_{A'} very happy]]

そうすると **be**動詞を取る構文も同じように分析できるようになる。

- (42) John is very happy.
 (43) a. [**e**] is [_{AP} John [_{A'} very happy]] → **NP**移動
 b. [NP John] is [_{AP} ti [_{A'} very happy]]

このように考えると、小節を補部を取るSVOC構文の場合と同じく、SVC構文というものも基本的には必要ないことになる。

3.3. 小節のXP分析の問題点

本節では、このXP分析にはいくつかの問題があり、小節補文の内部構造はもっと複雑なものであると思われることを示す現象を検討していく。

3.3.1. 述部移動

まず、次のような小節の述部が移動された例を見てみよう。

- (44) a. How intelligent do you consider John?
 < We consider John very intelligent.
 b. How good a teacher do you consider Mary?
 < We consider Mary a very good teacher?

移動は一般に最大投射であるXPが主要部Xにし適用できず、中間投射であるX'の移動は無いとされている(Chomsky 1986).⁽⁹⁾ しかしながら、StowellらのXP分析ではwh移動された部分はXP指定部の主語を除いたX'の部分に当たるので、移動の一般原則に違反することになって問題である。

- (45) a. We consider [_{AP} John [_{A'} very intelligent]
 [_{A'} How intelligent] do you consider [_{AP} John _]?
 b. We consider [_{NP} Mary [_{N'} a very good teacher]]
 [_{N'} How good a teacher] do you consider [_{NP}
 Mary _] ?

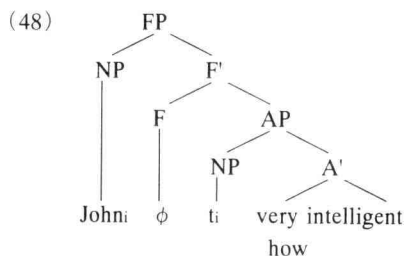
これらの例文は、XP分析とは異なり、次のように小節の述部がそれだけで最大投射XPとなっていることを示していると見なすことができる。

- (46) a. We consider [_{sc} John [_{AP} very intelligent]]?
 [_{AP} How intelligent] do you consider [_{sc} John _]?
 b. We consider [_{sc} Mary [_{NP} a very good teacher]]?
 [_{NP} How good a teacher] do you consider Mary?

この場合、小節全体の統語範疇と、小節主語のJohn がどこに生成されるが問題となる。

ここで「内部主語の仮説」を維持しようとする、主語のJohnは基底ではAP指定部に生成されるが、時制節の派生で見た主語繰り上げのように、後にこのAPの最大投射から外へ移動すると考えられる。その位置は、小節の構成素性から考えて、主節の目的語の位置ではないと考えられる。そうすると小節内には語彙的述語の最大投射の上にさらに何らかの投射があることになる。その主要部は発音されない、おそらくそれは機能範疇の投射であろう。ここでは仮にそれをFPとしておく。そうすると小節の構造は次のようになる。

- (47) a. We consider [_{FP} F [_{AP} John [_{A'} very intelligent].
 b. We consider [_{FP} Johni F [_{AP} ti [_{A'} very intelligent].



この構造ならば、小節の述部のwh移動は、主語の痕跡を含んだ述部の最大投射APが移動されたものとなり、中間範疇は移動できないという移動の原則に一致する。⁽¹⁰⁾

- (49) [_{AP} ti [_{A'} How intelligent] do you consider [_{FP} John
 F [_{AP}]?]

3.3.2. 小節補文の等位接続

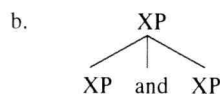
先に小節補文が単一構成素を成すことを示す証拠として、補文どうしの等位接続が可能であることを見たが、XP分析によれば小節補文は述語の最大投射であるので、述語の統語範疇が同一の場合にはよいが、異なった範疇の述語をもつ小節補文の等位接続が問題となる。

例えば、次のような文は文法的であるが、XP分析によれば異なる統語範疇の等位接続となってしまう。

- (50) a. We consider [[_{AP} John very intelligent] and
 [_{NP} Bill a genius]]
 b. John considers [[_{AP} Pat a bit insane] but [_{PP} Bill
 of sound mind]].

一般に、等位接続は同一範疇に属する構成素どうしの間にしか成立しないのが原則である。(パーレベルは関係ないので、XPだけでなくX'どうし、X動詞の等位接続も可能である)

- (51) a. $X \rightarrow X \text{ Conj } X$ Conj = and, or, but
 Bar-level irrelevant



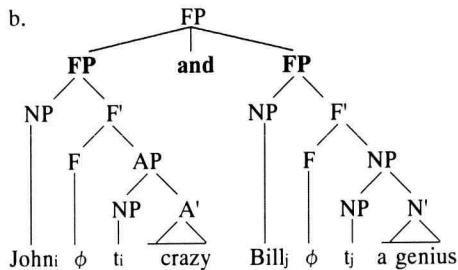
従って、これらの例は、XP分析とは異なり、小節補文全体の統語範疇は述部の統語範疇とは異なるものであることを示唆している。⁽¹¹⁾

さらに上で見たbe動詞構文でも、その述部が小節を成しているという分析では、同様の問題が生じる。cf. Sag et al. (1985: 117-118, 143) cf. also 稲田 (1988a, b), 梶田 (2000)

- (52) a. Pat is either [_{AP} stupid] or [_{NP} a liar].
 b. Pat is [_{NP} a Republican] and [_{AP} proud of it].
 c. Pat is [_{AP} healthy] and [_{PP} of sound mind].
 e. That was [_{NP} a rude remark] and [_{PP} in very bad taste].
 (Sag et al. 1985)

この場合も、上で見たように小節は述語の最大投射の上に機能範疇の投射を持っていると仮定すれば、その機能範疇句FPどうしの等位接続ということになり、等位接続の同一範疇性の条件の違反とはならない。

- (53) a. We consider [FP [FP Johni F [AP ti crazy]]] and [FP Billj F [NP tj a genius]]



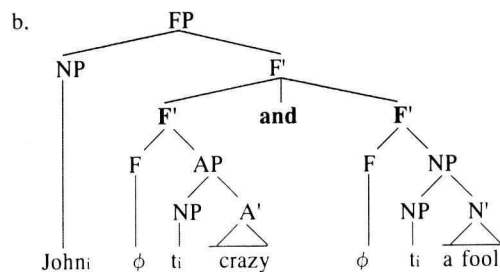
3.3.3. 小節述部どうしの等位接続

上でXP分析が小節の範疇を述語の投射とするために述語の範疇が異なった場合の小節どうしの等位接続が説明できないことを見たが、次のように小節主語が共通で、述部のみが等位接続される場合にも同じような問題が生じる。

- (54) a. I consider Fred [AP crazy] and [NP a fool]
(Bowers 2000:)
b. I consider that [NP a rude remark] and [PP in a very bad taste]. (Sag et al. 1985)

この場合も小節が語彙範疇の投射XPの上に機能範疇主要部Fの投射を持ち、小節主語がXP指定部からFPの指定部へと移動すると考えれば、等位接続は、移動と異なり、パーレベルに関係なく接続を許すことが知られているので、空の機能範疇主要部Fを含んだF'の等位接続として処理できる。

- (55) a. I consider [FP Fredi [F' [F F [AP ti crazy] and [F' F [NP ti a fool]]]]]



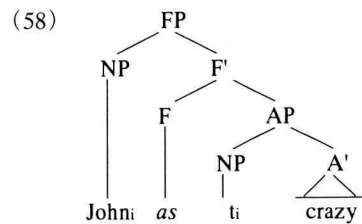
ここで興味深い例として次のような構文がある。それは、目的語と補語の間にasが生じる例である。

- (56) a. We regard John as crazy.
b. They regarded Bill as a fool.

この構文もいわゆる一種のSVOC構文であり、目的語とasの補語は主部と述部の関係にある。したがって、このas構文が小節補文であると考えるのは自然である。この補文が小節補文と同じように構成素を成していることは、次の等位接続文から分かる。

- (57) We regard [professors as strange] and [politicians as creepy].

しかし、小節のXP分析では、このasが生起する位置が存在しない。一方、小節が機能範疇句であるとする分析では、このasは上で見た空の機能範疇主要部が具現化したものと考えることができる(cf. Aarts 1992, Bowers 1993, 大庭 1998)。(12)



そして興味深いことに、この構文で小節の述部で範疇の異なったもののどうしを等位接続した場合には(59)のようにasを含んだF'の等位接続は許されるが、(60)のように述部の語彙範疇投射だけの等位接続は許されないということである(Bowers 1993: his 25).

- (59) They regard John [as crazy] and [as a fool].
(60) *They regard John as [AP crazy] and [NP a fool].

この場合も、述部の等位接続は実は機能範疇の中間投射F'どうしの等位接続であり(61)、述部の語彙範疇投射の等位接続は同一範疇どうしではないため排除されると説明できる(62)。

- (61) They regard [FP Johni [F' [F as] [AP ti crazy] and [F' [F as] [NP ti a fool]]]]]

- (62) *They regard [FP Johni [F' [F as] [[AP ti crazy] and [NP ti a fool]]]]]

こうした例は、小節の機能範疇分析が正しいことを強く示唆するものと思われる。(13)

3.3.4. 小節の節性：文副詞と虚辞の生起

さらには小節の内部に一般には語彙範疇の投射の内部には生起しないと思われる要素が生起することを示すデータがある。

まず、次に見るように、小節の主語として意味を持たない虚辞 expletives の it や there が生起するデータがある。

- (63) a. John considers it likely that Mary will win the game.
b. Let there be light !

を必要とし、また機能範疇の投射内でしか照合は成立しないと仮定する。

このように考えると、上で見た小節の内部に存在する機能範疇主要部は屈折辞Iであるように思えるかもしれない。そうすると、小節も、補文標識を取らないが、通常の節IPと同じものであるということになり、「小節」ではないことになる。しかしこれでは、通常の節にとっての必須要素である時制や、be動詞などが小節においては要らないのかが説明できない。

そこで以下では、こうした ϕ 素性の一致を説明する。屈折辞句IP分析以外の小節の分析の妥当性を主張する。

4.2. 分離屈折辞の仮説と一致句AgrP分析

「分離屈折辞の仮説 Split Infl Hypothesis: SIH」とは、屈折辞Iを時制辞Tと一致素性Agrに分離し、それぞれが機能範疇主要部としてTPとAgrPという最大投射を持つとする仮説で、Pollock (1989), Belletti (1990), Chomsky (1989/91) らによって提案された。

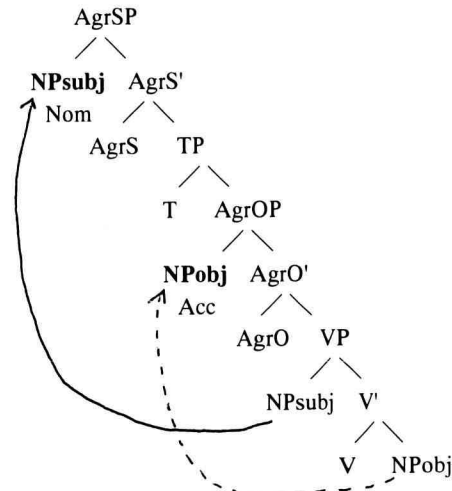
まずPollockはフランス語の不定詞節における動詞移動の事実から、動詞と屈折辞の間にもう一つ主要部の位置が必要であるとし、それを説明するために、今まで時制と一致の両方を含んでいた屈折辞I(nfl)が時制辞Tと一致要素Agrという2つの機能範疇主要部に分けられるとした。それによれば、フランス語の不定詞節では動詞は途中のAgr節点に留まることができる。その場合、節はTPとなり主語はTP指定部へと移動することになる。それに対し、Bellettiはイタリア語の動詞屈折を主要部移動により説明するために、Pollockとは異なり、文全体はAgrPであり、それが時制辞句TPを支配するという逆の構造を主張した。そのことによって動詞の屈折語尾の順序が「語幹-時制屈折辞-人称一致語尾」であるということが自然に説明されることになった。

Chomskyは、この両者の分析を折衷し、格付与を「指定部-主要部一致」で統一的に説明するために、一致句AgrPには時制辞Tと融合して主格を照合checkする主語一致句AgrSPと、目的格の照合のために動詞Vと融合する目的語一致句AgrOPの2つを持つとし、2つの一致句が時制辞句TPを挟んでいる次のような構造を提案した。ここでAgrSとAgrOは同一のAgrの位置による別称にすぎない。また、この構造では、従来の屈折辞句IPは(71)のようなAgrSPと再解釈されることになる(Cf. Chomsky 1989/91, 1992).⁽¹⁴⁾

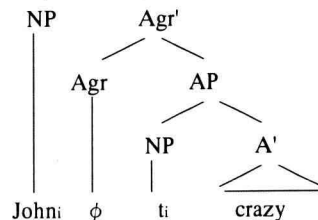
(72) 右 上

また補文の位置では主節の動詞から目的格を付与されればよいので、時制節において主格を与える主語一致要素AgrSも不要である。従って、小節には上の句構造におけるAgrOに対応する一致要素Agrが1つだけあれば良いことになる。そうすると、小節の一般的構造は次の(72)のような空の一致要素Agrを主要部とするAgrPであることになる(Cf. Y. Suzuki 1991, Nakajima 1991).⁽¹⁵⁾

(71) Agrに基づいた節構造



(72) AgrP (= SC)



このように「分離屈折辞の仮説(SIH)」を採用すると、上で見てきた小節の上にある機能範疇句FPの主要部Fは、小節は時制を欠くという点からも、時制と一致要素を含んだ屈折辞Iというよりは、むしろ一致要素Agrであると考えられる。そして、この一致要素Agrが小節における ϕ 素性の一致を「指定部-主要部一致」によって照合すると考えられる。そして、そのために小節述部の主要部はLFで隠在的にAgrへ繰り上がることになる。⁽¹⁶⁾

4.3. IP 分析との比較

以上、小節の構造は実は機能範疇Agrの投射であり、このAgrの存在によって主部と述部の間の一致が照合されることを見た。ここでは、このAgrP分析が先に見たIP分析を示唆するようなデータをどのように分析するかを簡単に見ていく。そして同時にIP分析にとっての問題も検討していく。

まず、小節補文の目的語名詞句が補文の主語の性格を持っていることの根拠として、虚辞の生起が挙げられたが、これはAgrP分析によればAgrP指定部がIP指定部と同じように、非 θ 位置になるとすれば問題はない。⁽¹⁷⁾

(73) John considers [it unlikely that Mary will win the prize].

(74) Let [there be light].

次に小節内における文副詞の生起であるが、これも必ずしもIP分析でなくとも、AgrP分析で処理

可能である。「分離屈折辞の仮説」に基づいた節構造では従来の文IPはAgrSPになることを思い出してもらいたい。この場合、文副詞は主語一致句AgrSPか時制辞句TPに依存することになるであろうが、AgrP分析ではAgrの付加とうことで処理できる。したがって、文副詞の生起はXP分析にとっての反論とはなっても、AgrP分析にとっては問題とにならない。

- (75) I deemed [AgrP John_i [Agr' *probably* [Agr' Agr [AP ti [A' afraid of snakes]]]]].

また、小節内における文を領域とする変形規則の適用可能性についても、虚辞の生起と同じように、AgrP指定部が非θ位置であるとすれば、そこへのNP移動が可能であると説明できる。

- (76) a. I want [AgrP it_i Agr [VP finished ti at once]]].
b. John considers [AgrP Mary_i Agr [AP ti likely [AgrP/TP ti to win the prize]]].

最後に等位接続に関する例を見てみよう。足立(1988)は次のような例を挙げて、小節がECM不定詞補文と等位接続できることから、小節の範疇もIPであると主張している。

- (77) ... he considers [[sc Mary homosexual] and [IP(ECM) Jane to be nymphomaniac]] (足立 1988)

これはXP分析を否定し、IP分析を支持するかなり強い証拠といえるかもしれない。しかしながら、「分離屈折辞の仮説」の下ではto不定詞節もAgrSPと分析でき、AgrPと同じ範疇となるので、AgrP分析にとっては問題とにならない。⁽¹⁸⁾

一方、IP分析を採る者にとっての問題となると思われるのは、節タイプによる機能範疇Iの分類の恣意性である。屈折辞I(nfl)は、先述のように時制要素Tと、主格の付与に関与し、名詞的性格を持つ一致要素Agrの有無によって最大次の4つに分類されるが、それを節のタイプに対応させようとすると、どうしても分類しきれないものが出てくる。たとえそれが経験的問題であるにしても、この4分類で全ての節のタイプを分類することには無理があるであろう。

- (78) 節のタイプ
i) 時制節
ii) 非時制節
a) 不定詞節 b) 動名詞節
iii) 小節
iv) 仮定法節
v) 命令文
- (79) a. Infl [+T, +Agr] = 時制節
b. Infl [+T, -Agr] = 命令文??/ to不定詞節??
c. Infl [-T, +Agr] = 仮定法節??/ 小節
d. Infl [-T, -Agr] = 小節/to不定詞節

さらには、時制辞Tも一致要素Agrもマイナスの指定を持つ屈折辞Inflの存在というのもおかしいものである。

5. 結び

以上、本稿では小節の構造が、従来仮定されてきたようなその述語Xの最大投射XPから成り、小節主語はXP指定部にあるとするXP分析は正しくないことを示し、「内部主語仮説」と「分離屈折辞の仮説」に基づいて、小節にも普通の節と同じように語彙範疇の投射の上にAgrPという機能範疇の投射が1つ存在することを見てきた。そして、この機能範疇主要部Agrの存在が、主部と述部間の一致をはじめとする小節の節性を説明することを見た。

小節のAgrP分析によれば、小節は従来考えられてきたほどには「小さな」ものではなく、むしろ普通の節により近い大きさの節であるということである。しかしながら、普通の「完全な節」には小節にない時制辞句TP（さらには動詞句の上のAgrOP）が存在している。その意味でいわゆる「小節」は、やはり「小節」なのであると言える。

註

1. Williams (1983, 1995), Pollard & Sag (1994), Rothstein (1983, 2001) などの「叙述理論」Predication Theory による分析。

2. to be 削除変形はだめ。cf. Ann Borkin (1984) 小節補文が、対応するECM補文からto beを削除・省略して派生できると考えられるかもしれないが、そのような変形規則を仮定するのは正しくない。

一般にtoとbeは単一構成素を成していないので、to beだけを変形によって一気に削除することはできない。

(cf. ただし、長谷川(2000:)での助動詞構造の分析をとれば可能となりうる) また不定詞標識のtoとbe動詞だけをそれぞれ単独に削除するような変形の存在も知られていない。従って、to be削除のような変形は形式的に存在しない。

さらに、この変形を仮定すると例外が多く生じてしまう(Ann Borkin 1984参照)。従って、変形による派生とするのには無理がある。

3. 動詞句が述部になるものについては他にも現在分詞(-ing形)や過去分詞があるが、それらについては後述。相を表すAspPの存在についてはFelser (1999)を参照。

(i) Nelson saw [them running away]

(ii) They feared [Pete shot by the army]. (Aarts 1992: 25)

4. 生成文法においてもかつて標準理論において、これらのSVOC構文は、基底となる深層構造(D構造)ではSVOと節補文をとるが、「目的語への繰り上げ変形Raising-to-Object」という変形によって表層構造(S構造)では、補文節の主語が主節の動詞の目的語の位置に

繰り上がっているという分析が成された。そこでは、この繰り上げ変形によって、この構文の持つ二重性を説明された。

- (i) a. We believe [s Garp (to be) a genius]
b. We believe Garp [s _ (to be) a genius]

もちろん、次のような純粋なSVOC構文も存在する。これらの構文では目的語名詞句ははじめから主節の目的語にあり、不定詞補文節の主語にはその目的語にコントロールされる発音しない空の代名詞要素であるPROが存在する。(これらの構文の分析についてはRosenbaum 1967, Postal 1974, 柴谷ほか1982などを参照)。

- (ii) a. John persuade Bill to leave early.
b. We told Mary to obey us.

しかし、その後 θ 理論の展開によって、移動は必ず非 θ 位置を着地点としなければならないことが前提されるようになり、主要部に選択され θ 役割が付与される目的語の位置への移動である「目的語への繰り上げ変形」などは可能な変形(α 移動)から排除され、補文の主語は基底から最後まで補文の主語の位置に留まるという分析が採用されるようになった。後述のECM分析参照。

ただし、最近の極小主義理論における分析では、再びかつてのように、目的語の部分が、はじめは小節の主語として小節内部に生成されるが、後に主節の方へ顕在的に移動されているという分析がある。(Koizumi 1993, 1995/2000, Runner 1994/1999, Boskovic 1997, Radford 1997a&b, Lasnik 1999 など参照) そうすると意味的にはSVO構文だが、表層では目的語が述部と分離していることになり、やはりSVOC構文となっているということになる。このようにこの構文は2面性を持っていると言える。(さらに長谷川(2000)の議論も参照)

5. 同じ名詞句移動でも主語繰り上げSubject Raisingは可能であることがSafirの例文から分かる。この主語位置の小節には問題が多く、詳しい分析は将来に回す。

6. 等位構造にはさらに、等位接続される要素(等位項)は同一の統語範疇に属するものでなければならない、などの平行性条件 parallelism condition がある(cf. 稲田 1988, 梶田 2000参照)。

7. 長谷川(2000)のように、上述のXバー理論における内心構造の原理は強すぎるとし、文Sは主要部を持たない外心構造であるとする者もいる。

8. ただし、すべての前置詞Pも主語を持つのかについては不明。小節述部の場合のように述部となりうる前置詞句は内部主語を持っても良さそう。

- (i) John is in trouble.
(ii) Don't let the cat into the house.

しかしながら、with, before, after などの述部とならず、副詞的修飾要素としてしか働かないような前置詞については問題である。これらの前置詞句の指定部には、主語ではなく次のような強意語 intensifier や計量語 measure phrase が生じるとされてきた(Cf. Emonds 1985, Radford 1988)

- (iii) Bill was seen on the spot just before the murder.
(iv) The police arrived there over an hour after the accident.

さらには、そもそも指定部とは何かについても検討の余地があると思われる。

9. 'X' が移動されるとする Culicover (1982)の「though 牽引」も、XP移動として再分析できることがNakajima (2000a)によって示されている。

- (i)a. [NP Child] though he was,

- b. *[NP A/The child] though he was,...
(ii)a. Though he was [NP a child],
b. *Though he was [NP/N' child],
(ii)a. [A' Young] though she is,
b. ?*[AP Very young] though she is,
c. Though she is still [AP (very) young],...

10. 顕在的な補文主語の主節目的語への繰り上げを認めるならば、次のようにXP移動であるとする事も可能である(cf. Huang 1993, Takano 1995)

- (i) a. How proud of himself do you consider John?
b. [AP ti how proud of himselfi] do you consider Johni

Huangによれば、前置されたwh句の中の再帰代名詞 himselfの先行詞はJohn であるが、束縛理論によれば、照応形である再帰代名詞は束縛条件Aに従い、先行詞によってその束縛領域内で束縛されていなければならない。Huangによれば、この場合、前置された述部句内に主語の痕跡があれば、その条件を満たすことになることとされ、この文が文法的になることから、内部主語仮説を支持する例となるという。

ただし、小節主語の移動先は議論されていない(Cf. also Takano 1995)。

11. 異なった範疇どうしの等位接続は原則として非文法的になる。

- (i) a. *John ate [Adv quickly] and [NP a grilled cheese sandwich]. (Schachter 1977: 87)
< John ate [Adv quickly] and John ate [NP a grilled cheese sandwich].
b. *John eats [NP pork] and [PP at home]. (Grosu 1985: 231)

- (ii) a. *the student [PP with long hair] and [S' who is from New York] (梶田 2000: 332)

- Cf. b. *[The scene [PP of the movie] and [S that I wrote]] was in Chicago. (Chomsky 1957: 87)

しかしながら、こうした異なった範疇どうしの等位接続でも、実際には次のように許される場合があることが知られている(cf. Sag et al 1985, 稲田 1990, 梶田 2000)。

A) 様態, 時, 理由などの副詞的表現

- (iii) a. We walked [Adv slowly] and [PP with great care].
b. They wanted to leave [NP tomorrow] or [PP on Tuesday]. (Sag et al 1985)

B) (長い)名詞後置修飾表現 (cf. 梶田 2000:232f.)

- (iv) a. ... that this man [PP with his almost Biblical love of Russian soil, ...] and [CP who in his anti-Stalinist novel, "The First Circle," called exile "spiritual castration,"] is one of the three debates who have been uprooted. (稲田 Inada 1988)

稲田はこうした例により、等位接続においては範疇の同一性だけでなく、意味・機能の同一性の方が重要であることを示していると指摘する。

12. この as は前置詞であるという者もいるが、それは正しくない。なぜなら前置詞は形容詞句APを補部に取り込むことはないからである。

Emonds (1985)のように、この as を前置詞的繫辞 copulaとする者もいるが、一種の繫辞であるという点では正しいが、前置詞ではないであろう。

13. Bowers (1993, 1999)は述部の最大投射句PrPの等位接続と分析する。

また大庭(1998)のLarson(1988)の等位句 &P に基

づいた等位接続構造の分析では、主語は&Pの外指定部へ移動するとしているが、その理由は等位接続詞のEPP素性が強いからというだけに止めている。

14. この格照合理論では、従来の統率に基づくECMは成立しなくなる。

代わりに動詞の目的語や、ECM補文や小節の主語はLFでの隠在的移動によってAgrOP指定部へ移動して目的格を照合されることになる。このとき動詞もAgrOと融合するためにLFでの主要部移動によりAgrOへ繰り上がる。cf. Lasnik 1993, Chomsky 1992, 1995.

15. 他動詞を主要部とする動詞句小節については、このAgrが目的格を照合する。動詞が原形不定詞の場合には、このAgrOPひとつだけでよいが、現在分詞(-ing形)や(受動態)過去分詞の場合には、その上にさらに、例えば相句AspPなどの別の機能範疇句が必要になるであろう。

16. この述語のLF移動により Guéron & Haegeman (1999: 110)で指摘されている語順の問題も解決される。

- (i). Je considère [les femmes très intelligentes]
[fem. pl.] [fem. pl.]

'I consider the women very intelligent'

彼女らの分析では屈折語尾は(ii)のように屈折辞主要部の位置に顕在するので、形容詞は繰り上げられねばならないが、そうすると(i)などで正しい語順が派生でない。正しい語順のためには屈折辞繰り下げを必要とするが、繰り下げ移動は好ましくない。

- (ii) a. Je considère [TP les femmes_i [I' [-e-s [AP ti [A' très intelligent-]]]]]
b. *Je considère [TP les femmes_i [I' [ti intelligent_a-e-s [AP ti [A' très t_a]]]]]

しかしながら、形容詞がLFで隠在的に移動するとすれば、そうした問題は生じない。

17. Nakajima (1991)は、小節の主語として虚辞のthere生起できないとして次のような例を挙げているが、この文の非文法性は小節だからというのではなく、存在のbe動詞が無いことに原因がある(Cf. Belletti 1988, Lasnik 1995)。

- (i) *John considers [there good reason to believe it].

実際、本文に挙げたようにbe動詞がある場合は文法的である。

18. to不定詞節では主格が付与されないの、時制節とは違ってAgrSPが無いとなると、ECM不定詞節の範疇はAgrSPではなくて時制辞Tである不定詞標識のtoを主要部とするTPとなり、等位接続が同一範疇の条件に従うとすると、AgrPである小節との等位接続が説明できなくなる可能性はある。

- (i) ... he considers [[_{AgrP} Mary homosexual] and [_{TP} Jane to be nymphomaniac]]

ちなみに、この例は小節をPredPと分析するBowers (1993, 2000)や空の繫辞を主要部とするVPとする大庭(1998)などにとっては問題となる。

参 照 文 献

- Adachi, K. (1988)「その他の構文: ECM補文, 小節, there構文」 今井邦彦ほか (1988).
- Akmajian, A. (1984) "Sentence Types and the Form-Function Fit." *Natural language and Linguistic Theory* 2: 1-23.
- Akmajian, A. and F. Heny (1975) *An Introduction to Transformational Syntax*. MIT Press.
- Baltin, M. R. (1995) "Predication and PRO." *Linguistic Inquiry* 26:
- Baltin, M. R., and C. Collins (eds.) (2000) *The Handbook of Contemporary Syntactic Theory*. Blackwell.
- Belletti, A. (1990) *Generalized Verb Movement: Aspects of Verb Syntax*. Rosenberg and Sellier.
- Borkin, A. (1984) *Problems in Form and Function*. Academic Press.
- Bowers, J. (1993) "The Syntax of Predication." *Linguistic Inquiry* 24: 591-656.
- Bowers, J. (2000) "Predication." in Baltin and Collins (eds.) (2000).
- Boš ović, Z. (1997) *The Syntax of Nonfinite Complementization: An Economy Approach*. MIT Press.
- Cardinaletti, A. and M. T. Guasti (eds.) (1995) *Small Clauses: Syntax and Semantics* 28. Academic Press.
- Chomsky, N. (1986) *Barriers*. MIT Press.
- Chomsky, N. (1989/1991) "Some Notes on Economy of Derivation and Representation." I. Laka and A. Mahajan (eds.), *MIT Working Papers in Linguistics* 10: 43-74. Department of Linguistics and Philosophy, MIT. Also in R. Freidin (ed.) (1991). Also reprinted in Chomsky (1995b).
- Chomsky, N. (1992) *A Minimalist Program for Linguistic Theory*. (MIT Occasional Papers in Linguistics No.1) Department of Linguistics and Philosophy, MIT. Reprinted in K. Hale and S. J. Keyser (eds.) *The View from Building 20: Essays in Linguistics in Honor of Sylvian Bromberger*. MIT Press, 1993, 1-52. Also reprinted in Chomsky (1995b).
- Chomsky, N. (1995b) *The Minimalist Program*. MIT Press.
- Contreras, H. (1995) "Small Clauses and Complex Predicates." in Cardinaletti & Guasti (eds.) (1995).
- Culicover, P. (1982) *Though-Attraction*. Indiana University Linguistics Club.
- Emonds, J. (1983) "Prepositional Copula As." *Linguistic Analysis* 12.
- Emonds, J. (1985) *A Unified Theory of Syntactic Categories*. (SGG 17) Foris Publications.
- Felser, C. (1999) *Verbal Complement Clauses: A Minimalist Study of Direct Perception Construction*. John Benjamin.
- Freidin, R. (ed.) (1991) *Principles and Parameters in Comparative Grammar*. MIT Press, 1991.
- Fukui, N. [福井直樹] (1986) "A Theory of Category Projection and Its Implications." Ph.D. dissertation. MIT. Published as *Theory of Projection in Syntax*. CSLI Publications and Kuroshio Publishing Co., 1995.
- Fukui, N. and M. Speas (1986) "Specifiers and Projections." N. Fukui, T. Rapoport, and E. Sagey (eds.) *MIT Working Papers in Linguistics* 8: 128-172.
- Gazdar, G., E. Klein, G. K. Pullum, and I. A. Sag (1985) *Generalized Phrase Structure Grammar*. Basil Blackwell.
- Guéron, J. and L. Haegeman (1999) *English Grammar*. Blackwell.
- Haegeman, L. (1994) *Introduction to Government & Binding*

- Theory* (2nd edition). Blackwell.
- Hasegawa, K. [長谷川 欣祐] (2000) 『現代の英文法4: 文1』 研究社出版.
- Imai, K. et al. [今井 邦彦, 中島 平三, 外池 滋夫, 足立 君也] (1989) 『一歩進んだ英文法』 大修館書店.
- Inada, T. [稲田 俊明] (1988) 「異なる範疇の等位接続(1), (2)」『英語教育』37-9: 70-72, 37-10: 66-68.
- Kajita, S. [梶田 幸栄] (2000) 「等位構造」 in 長谷川 (2000).
- Koizumi, M. [小泉 政利] (1995) "Phrase Structure in Minimalist Syntax." Ph.D. dissertation, MIT. Published as Koizumi (2000) Hituzi Syobo.
- Koopman, H. and D. Sportiche (1991) "The Position of Subjects." *Lingua* 85: 211-258.
- Larson, R. K. (1988) "On the Double Object Construction," *Linguistic Inquiry* 19: 335-391.
- Lasnik, H. (1993) *Lectures on Minimalist Syntax*. (U. Conn. Occasional Papers in Linguistics 1), University of Connecticut. Distributed by MITWPL. Also in *Minimalist Approaches to Syntax and Morphology*, S.-H. Park, et al. (eds.), 1-70. Hankoku Publishing Co., (1994) and reprinted in Lasnik (1999).
- Lasnik, H. (1999) *Minimalist Analysis*. Blackwell.
- Lasnik, H. and M. Saito (1991) "On the Subjects of Infinitives." *CLS* 27. Part 1. 324-343.
- Lasnik, H. and M. Saito (1992) *Move- α : Conditions on Its Applications and Output*. MIT Press.
- Manzini, M. R. (1983) "Restructuring and Reanalysis." Ph.D. dissertation. MIT.
- Miyagawa K. [宮川 圭子] (1990) "Small Clauses and To-Infinitival Clauses." *Tsukuba English Linguistics* 9: 271-293.
- Nakajima, H. (1991) "Reduced Clauses and Argumenthood of AgrP." in H. Nakajima and S. Tonoike (eds.) (1991).
- Nakajima, H. (2000) "Irregular Though *Though*-Attraction Seems To Be." In M. Muraki and E. Iwamoto (eds.) *Linguistics: In Search of the Human Mind - A Festschrift for Kazuko Inoue*. Kaitakusha Co. Ltd..
- Nakajima, H. and S. Tonoike (eds.) (1991) *Topics in Small Clauses*. Kurosio.
- Napoli, D. J. (1989) *Predication Theory: A Case Study for Indexing Theory*. Cambridge University Press.
- Oba, Y. [大庭 幸男] (1998) 『英語構文研究 - 素性とその照合を中心に』 英宝社.
- Ouhalla, J. (1994) *Introducing Transformational Grammar: From Rules to Principles*. Arnold.
- Ouhalla, J. (1999) *Introducing Transformational Grammar: From Principles and Parameters to Minimalism*. (2nd edition) Arnold.
- Pesetsky, D. (1995) *Zero Syntax: Experiencers and Cascade*. MIT Press.
- Pollock, J.Y. (1989) "Verb Movement, Universal Grammar, and the Structure of IP." *Linguistic Inquiry* 20: 365-424.
- Postal, P. M. (1974) *On Raising: One Rule of English Grammar and Its Theoretical Implications*. MIT Press.
- Radford, A. (1988) *Transformational Grammar: A First Course*. Cambridge University Press.
- Radford, A. (1997) *Syntactic Theory and the Structure of English*. Cambridge University Press.
- Rosenbaum, P. S. (1967) *The Grammar of English Predicate Construction*. MIT Press.
- Runner, J. (1994/99) *Noun Phrase Licensing*. Garland.
- Safir, K. (1983) "On Small Clauses as Constituents." *Linguistic Inquiry* 14: 730-735.
- Safir, K. (1987) *Syntactic Chains*. Cambridge University Press.
- Sag, I. A., G. Gazdar, T. Wasow, and S. Weisler (1985) "Coordination and How to Distinguish Categories." *Natural Language and Linguistic Theory* 3: 117-171.
- Sportiche, D. (1988) "A theory of Floating Quantifiers and its Corollaries for Constituent Structure." *Linguistic Inquiry* 19: 425-49.
- Stowell, T. (1983) "Subjects Across Categories." *The Linguistic Review* 2: 285-312.
- Stowell, T. (1989) "Subjects, Specifiers, and X-bar Theory." In R. Baltin and A. Kroch (eds.), *Alternative Conceptions of Phrase Structure*. Chicago University Press.
- Stowell, T. (1991) "Small Clause Restructuring." In R. Freidin (ed.) (1991).
- Stowell, T. (1995) "Remarks on Clause Structure." In Cardinaletti & Guasti. 271-286.
- Suzuki, T. [鈴木 徹] (1988) "Small Clauses and Perception Verb Complements." *English Linguistics*
- Suzuki, Y. [鈴木 右文] (1991) "Small Clauses as AgrP." in H. Nakajima and S. Tonoike (1991).
- Takano, Y. [高野 祐次] (1995) "Predicate Fronting and Internal Subjects." *Linguistic Inquiry* 26: 327-340.
- Watanabe, A. [渡辺 明] (1993) "Agr-based Case Theory and A-bar Dependency." Ph.D. dissertation, MIT.
- Williams, E. (1981) "Predication." *Linguistic inquiry* 10:
- Williams, E. (1983) "Against Small Clauses." *Linguistic Inquiry* 14: 287-308.
- Williams, E. (1994a) "A Reinterpretation of Evidence for Verb Movement in French." In *Verb Movement*, D. Lightfoot and N. Hornstein (eds.), Cambridge University Press.
- Williams, E. (1994b) *Thematic Structure in Syntax*. MIT Press.